

平成18年11月7日 北海道佐呂間町若佐地区竜巻災害(その後)



写真-1 貫通式(貫通発破の儀)

一般国道 333 号 新佐呂間トンネルは、2001(平成 13)年 10 月 4 日 北見市北陽で発生した岩盤崩落災害を契機に、現ルートの詳細に調査したところ、ルクシ峠付近にはまだ同様の地質が存在することから、危険を回避するため計画された新ルート上のトンネルで、完成時には北海道の国道では 2 番目の長さになる全長 4,110m の長大トンネルである。

工期は 2004(平成 16)年 12 月 18 日より 2008(平成 20)年 3 月 18 日までの 39 ヶ月で、竜巻災害時は佐呂間側 1,903m、北見側 1,119m まで掘削を終え、残りは 1,088m となり、2007(平成 19)年 7 月中旬には貫通できる見込みであった(写真-1)。

事務所前には「インフォメーションセンター」を開設、トンネル工事の紹介とトイレの提供を行い、また近隣には『ミニコミ誌 わかさ新聞』を毎月 1 回発行、トンネルの進捗状況やさまざまな話題を提供、当初 30 部ほどだった発行部数も、現在では 130 部が近隣自治体や学校へ配布されている。

トンネル工事の特性として掘削が進行するに伴い、外からは見えなくなり、また、完成後にはどのように建設したのか想像することも難しく、トンネル内部を公開して、公共工事の PR を行うとともに、われわれが昼夜 2 交替で総勢 100 名(最大 130 名)が、約 3 年間にわたり汗を流して完成させる新佐呂間トンネルを、将来にわたり記憶に留めてほしいとの思いから、現場見学会を随時受け付けて開催した(2007(平成 19)年 10 月 10 日現在 2,076 名)。

すべてが順調と思われていた 2006(平成 18)年 11 月 7 日 午後 1 時 25 分頃、あの竜巻が無風



写真-2 旧工事事務所跡地(右は被災直後)



写真-3 若佐地区復興状況(右は被災直後)





写真-4 工事事務所、宿舎(現在)

小雨のなかから忽然と現れ、一瞬にして事務所、宿舎の2棟を破壊、企業体事務所の2階会議室で、定例打合会議に参加していた8名が、建物とともに約90mも飛ばされ、1階にいた1名と合わせて9名が尊い命を失い、さらに16名もの重軽傷者を出すことになった。また、若佐市街では死亡者こそ出なかったものの、多くの建物が全半壊するという大惨事になった(写真-2、3)。

竜巻が発生した11月7日は例年になく早朝から暖かく、午前8時の気温は13℃、正午には18℃まで上昇した。午前10時頃には真っ黒な墨を流したような雲に覆われ、正午過ぎからは無風ではあるもののパラパラと小雨が降ってきた。

定例打合せが終了してわずか数分で、ヒューという不気味な唸り声のような音が聞こえた直後、爆風のようなものが通り過ぎ、すべてのものが宙へ浮いていった。

気がつくと、周囲はそれまでの見慣れた光景とは一変し、協力会社の事務所棟は折れ曲がり、企業体事務所は完全になくなり、竜巻であることを確認できたのはさらに20分あまり後のことであった。

飛ばされた事務所の前で倒れている5名を見つけたが、われわれができることは近くの毛布や布団をかけて、救急車を待つことだけで、その後は近隣の方々が駆け付け、さらに警察、消防が相次いで到着、そして周囲は騒然となっていた。

被災後は発注者をはじめ各関係機関、佐呂間町をはじめとした近隣自治体の支援をいただき、企業体としても全社を挙げて再開準備を進め、被災1ヶ月後の12月8日から作業を再開、同月14日より



写真-5 若佐神社御神輿(事務所前、10月7日)

トンネル掘削を再開した。また、事務所、宿舎を失ったことから、佐呂間町の旧若佐小学校校舎を借用して、臨時の事務所、宿舎として使用させていただき、その後校庭に新事務所、宿舎を建てた(写真-4、5)。

2007(平成19)年9月14日、遺族をはじめ多くの方々が参加して貫通式が行われた。貫通式に先立ち、被災地に建立された慰霊碑で、亡くなった9名の慰霊式が執り行われ、無事貫通の報告を済ませた(写真-6)。

最後になったが、全国の皆様方から数多くの善意が寄せられ、ご心配や温かい励ましのお言葉を賜り心より感謝申し上げます。これら多くの善意により慰霊碑が建立できたことをここにご報告する。

佐呂間町若佐をお通りになるときは、たとえ短い時間でも慰霊碑にお立ち寄りになり、お参りいただければ幸いです。



写真-6 慰霊碑(揮毫:冬柴鐵三(国土交通大臣))

松木平恒美 MATSUKIHIRA Tsunemi
鹿島・岩田地崎・宮坂特定建設工事共同企業体
新佐呂間トンネル工事事務所 統括所長